

| | |
|---------|--|
| 氏名 | 渡 邊 泰 彦 |
| 授与した学位 | 博 士 |
| 専攻分野の名称 | 医 学 |
| 学位授与番号 | 博乙第 3366号 |
| 学位授与の日付 | 平成11年6月30日 |
| 学位授与の要件 | 博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当) |
| 学位論文題目 | Assessment by pulse dye-densitometry indocyanine green(ICG) clearance test of hepatic function of patients before cardiac surgery:its value as a predictor of serious postoperative liver dysfunction (脈波分光法ICG試験による心臓手術患者の術前肝機能評価) |
| 論文審査委員 | 教授 佐野 俊二 教授 辻 孝夫 教授 大江 透 |

学位論文内容の要旨

開心術患者において術前肝機能障害を有する場合、手術を契機として肝機能が悪化し予後不良となることがある。脈波分光法インドシアニングリーン試験を術前評価法にとり入れ術後肝不全の診断法として興味ある結果を得た。術前生化学検査にて肝機能異常を呈した 27 例に対し ICG 静注後 15 分後の血中停滞率 (R15) を求め、他の術前評価法 (Child-Pugh score) と比較検討した。また術前肝障害の成因により 4 群 (うっ血肝: I 群、うっ血肝合併ウイルス性肝炎: II 群、ウイルス性肝炎: III 群、肝硬変: IV 群) に分類し R15 の値と術後経過についても検討した。Child 分類は術前評価と手術成績が一致しなかった。一方、R15 の値は 27 例中死亡した 6 例すべてにおいて 40% 以上であった。R15 は術前肝機能評価法として有用な指標となる可能性が示唆された。肝硬変による肝障害症例では、R15 が 40% 以上の場合、その手術成績は極めて不良であることを念頭において手術適応の判断をする必要がある。

論文審査結果の要旨

開心術における肝機能障害は重要な risk factor の一つである。

本研究では、脈波分光法インドシアニンググリーン試験を術前評価法に取り入れ、ICG 静注後、15 分後の血中停滞率 (R15) と術後肝不全; 手術成績と比較検討した。その結果、肝硬変による肝障害症例では R15 が 40% 以上の場合、その手術成績は極めて不良である事が分かった。

従来 Child-Pugh score より更に鋭敏な指標を示したことで、価値ある業績である事を認める。

よって、本研究者は博士 (医学) の学位を得る資格があると認める。